

戦没者追悼のかたち

～ 沖縄全戦没者追悼式前夜祭と伝統芸能の奉納 ～

佐藤 壮 広

〔大正大学・立教大学他兼任講師〕

大正大学や立教大学などで講師を務めている佐藤壮広(さとう たけひろ)さんに沖縄協会が実施している「沖縄全戦没者追悼式前夜祭」について執筆していただいた。佐藤さんは宗教人類学の立場から沖縄のシャーマニズムなどを研究している。沖縄全戦没者追悼式前夜祭の式典で奉納される伝統芸能の意義について調査するため、去年、今年と同前夜祭に参列した。

はじめに

6月22日、私は今年も那覇へ飛んだ。糸満市摩文仁の平和祈念堂で開かれる「沖縄全戦没者追悼式前夜祭」へ出席するためである。夕刻から始まった式典では、全国から集まった遺族らによる黙とうと献花が行われ、続いて琉球古典音楽の代表者らによって、次の句が献奏された。

ふさかいゆる木草 めくる戦跡 くり返し返し 思ひかけて

約350名の出席者が、その響きを聴いた。句は、八・八・八・六形式の琉歌。作者は、現在の天皇である。天皇は、皇太子時代の1975年に、沖縄国際海洋博覧会へ出席するため沖縄を訪れた。南部の戦跡を巡るなか天皇は、一家全滅の家屋跡や「魂魄の塔」を目にした。その折に詠んだのが、右の琉歌である。天皇の琉歌が摩文仁で催される追悼式前夜祭で奏でられる。それを、いわゆる天皇制を補強する心情的かつ政治的パフォーマンスだとする批判は、十分に可能である。しかし同時に、天皇の琉歌は、現代の戦没者追悼のかたちを問

うものとして意義がある。私には、そう思われるのである。その理由は、作者が天皇だという点にあるのではない。むしろ、演奏の場では「テンノウ」という名さえ無化されるほど、聴き手と演じ手、過去と現在が重なり合いつつ、独特な追悼・慰霊の時空が創り出されている。私はここに、芸能を通じた戦没者追悼の可能性をみるのである。以下、前夜祭の主催団体である沖縄協会の活動概要にもふれつつ、戦没者追悼のかたちをみていく。

1 財団法人沖縄協会の活動概要

前夜祭を主催しているのは、財団法人・沖縄協会(東京都千代田区霞が関)である。協会の前身は、特殊法人「南方同胞援護会」(1957年発足)で、同会は沖縄の公共福祉事業などを推進した機関である。その後、沖縄の日本本土復帰に伴い、同会の業務は財団法人・沖縄協会へと引き継がれる。沖縄協会は1972年、「歴史的な祖国復帰を遂げた沖縄の平和で豊かな県づくりに、積極的に協力するために」(財団法人沖縄協会『沖縄協会のあらまし』p.1)発足した。その主務官庁は、内閣

府である。沖縄協会の活動は、多岐にわたる。主な活動としては、沖縄の地域振興について考える「沖縄問題研究会」の開催とその成果の刊行、沖縄研究奨励賞の授与、沖縄地域振興開発のための調査研究、地域振興への協力、本土で働きながら学ぶ沖縄青少年への勉学支援、沖縄平和祈念堂の管理・運営である。

同協会が運営する平和祈念堂の年間行事には、大きなものが3つある。こどもまつり（5月5日）、沖縄全没者追悼式前夜祭（6月22日）、摩文仁火と鐘のまつり（大晦日～元旦）である。なかでも、ここで取りあげる前夜祭は、もっとも重要なものである。その活動方針とは、「沖縄戦終結の日の六月二十三日をより意義深いものにするため、その前夜に「慰霊の火」を灯し、戦没者の御霊の安からんことを祈る」（財団法人沖縄協会『（財）沖縄協会二十五のあゆみ』1997年、p.92）ことにある。

“六月二十三日をより意義深いものにする”とは、いったいどういうことなのか。平和祈念堂管理事務所長・比嘉正詔氏によれば、「平和祈念堂は、み霊に慰霊の気持ちを捧げる施設ですから、23日の式典に参列する方々には、前夜祭と（追悼式とを）セットで考えて欲しい。また、平和の礎よりも前に建立された施設なので、こちらにも足を運んで欲しい」とのことである。平和祈念堂の完成は、1978年。平和の礎の建立はその17年後の1995年。あとに建てられた平和の礎のほうが、追悼施設としては広く知られている。また、前夜祭の参列者が350名余であるのに対し、23日の追悼式では、会場内外併せて6,000名近い参列者がある。これらの追悼式と前夜祭は、なぜ“セット”になるのだろうか。このことを考えるため、私は何度か前夜祭と追悼式に足を運んだのである。そして前夜祭と追悼式が、沖縄という場に根ざした「奉納の夕べ」と、より公的かつ国家的な「追悼式典」という関係においてセットになっている、と考えるようになった。この点を、次に詳しく述べる。

2 沖縄全戦没者追悼式前夜祭と追悼式

まず、両式典の様子を、式次第を追いながら紹介する。前夜祭は、2部構成になっている。平成15年度の第

1部の式次第は、次の通り。1.開式、2.献火（沖縄県遺族連合会代表）、3.献鐘（日本遺族会代表）、4.黙とう（参列者一同）、5.鎮魂（しずたま）のこぼ（沖縄協会会長）、6.「平和の礎刻銘者名簿」奉納、7.献花（参列者および関係機関代表）。第1部の2.献火は、堂の入口の広場に設けられた聖火台に、鎮魂の祈りを込めて点火する儀式である。3.献鐘では、午後7時に7つの海と7つの大陸に向けて「平和の鐘」（入口に建立されている）が打ち鳴らされる。参列した遺族らの代表が、追悼と平和の思いを込めて、鐘をつく。その響きは、平和の礎のひとつひとつに、波のように広がる。第2部は、平和祈念像とその前に設けられた祭壇を正面にして演奏者らが座し、献奏が始まる。初めに、現在の天皇が皇太子時代に詠んだ歌が、琉歌「瓦屋節」にのせて演奏される。そのあと、琉球舞踊奉納、琉球古典音楽独唱献奏と続く。全国から集まった遺族たちは、み霊とともに、ゆっくりと音楽と踊りを楽しむのである。

前夜祭の特徴は、まず第1部の2.献火や3.献鐘など、視覚と聴覚にうったえる追悼行為があることである。4.黙とうは、追悼式と変わらない。そして何よりも特徴的なのは、琉球古典の献奏と琉球舞踊の奉納がされることである。はじめに、参列者全員が祭壇のみ霊に向き合う。音楽は、み霊がいるであろう方向へと響いていく。演奏者らは、真剣な面持ちで、ひと音ひと音弾いては、歌を唄う。彼らは、死者に向き合い、死者の慰撫と追悼のために、音楽を奏でる。

翌23日の追悼式の次第は、次の通りである（式次第は平成14年度のもの）。1.開会の辞（沖縄県副知事）、2.黙とう、3.式辞（沖縄県知事）、4.追悼のこぼ（沖縄県遺族連合会会長）、5.献花（県知事、県議会議長、内閣総理大臣、参議院議長、日本遺族会会長、沖縄協会会長、衆議院議員ら）、6.慰霊電報奉読、7.「平和の詩」朗読（名護愛 具志川高校3年）、8.平和宣言（沖縄県知事）、9.放鳩、10.来賓あいさつ（内閣総理大臣、参議院議長、沖縄県議会議長）、11.閉会の辞。

追悼式では、以上のように県単位の宣言や公人による挨拶がほとんどである。これは、8月15日の全国戦没者追悼式や、長崎の原爆犠牲者慰霊平和記念式典、広島の大原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式のフォームと、ほぼ一緒である。しかも、沖縄県の人びとは、列

席する公人たちとはふだんの生活の中で触れ合うことは、ない。追悼式の献花の際にも、琉球古典音楽が献奏される。だがそれは、限りなくBGMに近い。それは、演奏者らがみ霊に向き合い、音楽を献じるという雰囲気とは、ほど遠いのである。前夜祭とは対照的に、そこはもはや音楽に聴き入る場ではない。さらに言えば、追悼式では、「沖縄全戦没者追悼式」の“沖縄”という部分が薄れ、だいが背後に退いてしまっているのである。

3 伝統芸能と追悼

先に私は、前夜祭＝沖縄という場に根ざした「奉納の夕べ」、追悼式＝より公的かつ国家的な「追悼式典」と、両者を整理した。この整理の意味を、伝統芸能と追悼という視点から述べてみたい。

前夜祭では、なぜその場（土地）に根ざした音楽が奏でられ、舞踊が奉納されるのだろうか。一つ目の理由は、沖縄には芸能を通して慰霊をしてきた文化がしっかり根付いているからである。沖縄の人びとは、喜怒哀楽の情を、自分たちのからだの中で育んだ表現にのせ、伝えてきた。地上戦で犠牲になった身内や親族のマブイ（魂）を慰めるため、式典の時のみならず、墓前でも三線（さんしん）を弾き、唄をうたう。前夜祭で技芸を披露する演奏家や舞踊家らも、多くは肉親や親族を沖縄戦で失った遺族である。つまり、前夜祭に集う人びとは必ずしも演奏者と聴衆（遺族）という関係にはなっていない。演奏者の響きは当然、自身へも向けられているのである。

二つ目の理由は、他都道府県から訪れる遺族をもてなすためである。6月23日の追悼式に出席するため、前日までに沖縄本島入りした遺族らが、前夜祭を訪れる。前出の比嘉氏によれば「遠く県外から来られた遺族の皆さんに、沖縄の伝統芸能を楽しんでもらうというのも、前夜祭の意味のひとつ」だという。ここに、観光が大きな収入源である沖縄の現状と59年前の沖縄戦の過去とのむすびつきを見ることができる。見方を変えれば、み霊が、遺族たちを沖縄へと誘（いざな）い続けているのである。

さらにもう一つの理由は、平和祈念堂のある摩文仁

が、沖縄戦で追い詰められた住民や軍人たちの最期の地だからである。整備された公園と刻銘碑・平和の礎、その先へ広がる紺碧の海。今日でこそ、そこは静寂な追悼・慰霊空間である。しかし足元の土には、たくさんの戦死者の血と声がしみこんでいる。その声を聴かない限り、戦死者の追悼や未来へ向けての平和祈念は、決して力をもつまい。個々の死者を刻印し続けている土地。そこで追悼式典や慰霊祭が行われる意義は大きい。

おわりに

今日、新しい追悼施設建設をめぐる論議が進みつつある。「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会」では、慰霊を目的としない、追悼対象を細部まで特定しない、無宗教の施設という3つのポイントを中心に議論をしている。しかし、上でみてきた前夜祭の追悼のかたちは、その議論の方向とは異なるのである。

大切なのは、土地をふんだんに利用した広場、大金をつぎ込んだ建物、きれいに整備された施設など、ハード面で新しい「施設」を構想するかということではない。焦点は、追悼の思いをいかに表現し、平和を祈り続けられるかというソフト面にある。こうした観点から冒頭の琉歌を見ると、そこに、追悼のかたちの一つの可能性があると考えることができるのである。

註：本稿は、次の2つの拙稿を改めたものである。「追悼のかたち——沖縄全戦没者追悼式前夜祭と伝統芸能の奉納」『国際宗教研究所ニューズレター』（財団法人国際宗教研究所）第39号、「戦争と向き合う」（上）京都新聞、2004年8月10日付朝刊。

